

ミュージアム・ティーチャー ワークショップ 概要報告

滋賀県立琵琶湖博物館（交流担当 主査 中村公一）

2008（平成20）年2月11日～12日に琵琶湖博物館を会場として、『ミュージアム・ティーチャーワークショップ』を開催した。これは現在ミュージアム・ティーチャーとして博物館にいる教員、博物館での教育・学校連携事業に関心のある方々と、話題提供・事例発表・討論することで、人と人のネットワークを構築し、日本型教育システムにおけるより有効な博学連携の方策について探りたいと考えたものである。ワークショップとしたのは、「教えられたり、教えたり」と相互の学びの場ととらえた。関東・北陸～九州より、23園館（歴史・考古・科学・自然史・総合・水族館等）38名の園館スタッフと4大学・高校より6名の参加があった。以下はその概要をまとめたものである。

プログラム

2月11日（月）		2月12日（火）	
（10:30～）	希望者のみ＝館内ガイドツアー	9:00～	事例紹介 ・ 質疑
12:30～	受付		昼食休憩
13:00～	オリエンテーション	13:00～	総合討論
13:20～	スーパーバイザーによる話題提供	15:00	終了予定
15:30～17:00	事例紹介 ・ 質疑		
（17:30～）	希望者のみ＝情報交換会		

オリエンテーション

アイスブレイクを兼ね、このワークショップに期待することを参加者がフラッシュカードに書き、自己紹介を兼ねて発表した。

<ul style="list-style-type: none"> ● 琵琶湖博物館に来てみたかった ● ウケる学習プログラムのヒント ● 斬新なアイデアを得られれば ● 学校遠足がもっと楽しくなる方法 ● ワークショップのさらなる進む道 ● すぐに役立つものを求めています ● 他を知る ● 子ども向けワークシートづくりへむけての知恵 ● ヒント ● 体験展示の今とこれから ● 先進的な事例を聞き、今後の参考に ● 活動の実際 ● 教育活動の実践例 ● どんな活動をしているの？ ● 最新の学校教育との連携の取組を知る ● ネタ探し ● 頼れる人さがし ● みなさんとのつながり ● ミュージアム・ティーチャーのネットワークづくり 	<ul style="list-style-type: none"> ● 新しい発想とネットワーク ● 博物館のあり方（システム） ● 何をすればいいの？ ● 学習支援者としてのあり方 ● どう学べるか？ ● 博物館での学び ● 博物館での学びのデザイン ● 一過性でない学校との関係を考えたい ● 「博学連携はどうしたら進むのだろうか」を考えたい ● ミュージアム・ティーチャーってどんな人なの？ ● 博物館の先生とは ● 情報交換＆営業 ● コミュニケーション ● 新発見 ● 学校の先生方が博物館にどんなことを望んでいるかを知りたい ● 新しい発見 ● 卒論の参考に
---	---

スーパーバイザーによる話題提供

宮崎大学教授 中山 迅氏

中山先生も元々広島県で中・高等学校の教員であり、現在宮崎大学で理科教育学の研究をされている。「生徒の学習」に焦点を当てた研究をしてこられたが、科研費による博学連携の研究プロジェクトに入ることとなり博学連携の研究も始められた。今回はその研究の中から、延岡市の中学校での干潟を利用した実践事例と高原町の中学校で、テフラ（火山砕屑物）を素材として家庭教育学級をも巻き込んだ「サイエンス・コミュニケーターとしての理科教師を育てる博物館研修の事例研究」の2例を使い、博学連携のあり方について、話題提供をしていただいた。

博学連携を行う上でのそれぞれの願い

< 学校の願い >

地域の自然について知りたい。
先端の科学技術を知りたい。
標本や写真、実物を使いたい。
専門家の知恵を借りたい。

< 博物館の願い >

顧客を増やしたい。
アウトリーチ先を見つけたい。
研究者が自分の研究成果を発表する場所が欲しい。

学校は基本的に「教育」(教えたい)、博物館は「コミュニケーション」(専門的なことをやりたい)、というようなことを考えているのではないか。それぞれの得意技としては、学校は指導要領や教材をよく知っていて生徒の実態もわかっているので、生徒向けの教育は得意。博物館は教育のことは知らないが、素材や環境や文化とかフィールドについてよく知っている。物や情報をよく知っている、ある年代に限られるかもしれないが、多様な人たちをよく知っている、このような得意技をくっけると何かできるのではないか。

連携を始める前の博学連携は、学校は指導要領に明示されたため、とりあえず博物館に来るが先生に目的がない状況であった。(来館することが目的になっている)博物館側も児童生徒に何を見せればよいのかわからない。学校からは本質でない質問ばかり出て、博物館はうんざりしている現状があった。そこで、生徒にとって学習に意味のあるものであり、博物館の事業と緊密に結びつくものを設定し、博物館の利用が生徒の問題解決の糸口になるような学習展開の流れをめざした。結果として博物館に行ったときに生徒にとって意味のある、継続してできるフィールドを見つけることが成功の鍵ではないか。



琵琶湖博物館上席総括学芸員 布谷知夫氏

琵琶湖博物館に準備室時代よりかわり、それ以前は大阪自然史博物館に勤めておられた博物館学の研究者である。学芸員の立場として、「博物館はどう考えているか」を話題提供していただいた。

博物館が準備する学習活動

博物館法2条は4つの業務を示しているが、琵琶湖博物館では5つを事業としている。普及教育という言葉に対して琵琶湖博物館では交流という語を使っている。教育とは既存の知識を伝えることであると当初私たちは考えたからである。博物館という場は博物館が持っている情報・知識を一方向的に伝える場所ではない、「交流」することが、これからの博物館での学習活動の中心になっていくと考えた。琵琶湖博物館は 湖と人間というテーマをもった博物館 フィールドへの誘いとなる博物館 交流の場となる博物館という、3つの基本理念を考えている。地域の情報を持った人が博物館に来てくれる、自分の持っている情報と博物館の持っている情報がいつも行き来する。そのために人もいつも行き来する、博物館はそのような場所でありたいと考えた。なので「交流」という語を大切にしている。

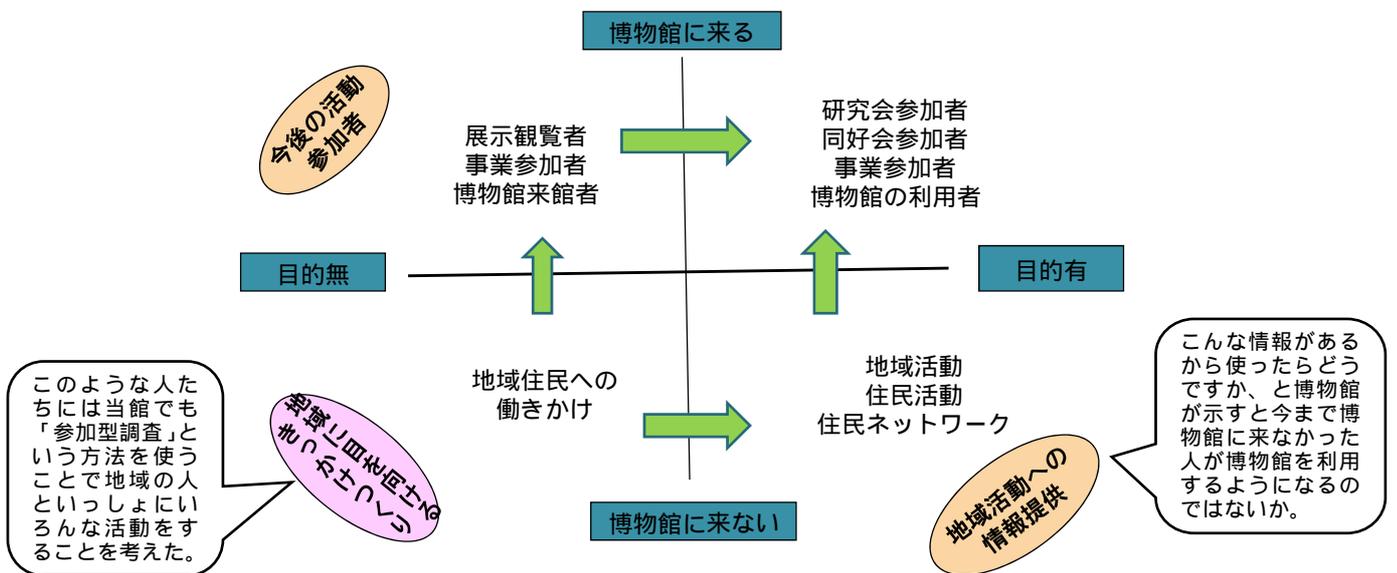
基本的な博物館での学習活動のあり方

基本的には学芸員が持っている情報を求めてくるのであるが、最近は「自由な学び」の場であるとも言われてきた。学校教育は多人数に同じことを教えるのに比較し、個人個人が自分の知りたいことを博物館に来て、自分の力で、あるいは博物館の情報をもって、あるいは利用者同士の交流の中で学びを起こす。そのような学びを「自由な学び」とよんでいる。

博物館にかかわって何かのグループに参加したいと思う人、学芸員の知識を軸にし、同好会や研究会をつくる、あるいは友の会があり参加をし、勉強をする。基本的にはこのようなことをやってきた。場合によれば展示に利用者が参加する方法もつくってきた。

博物館に来るか来ないか、また目的の有無で人々をカテゴリー分けして示したのが、次の図である。

博物館が対象とする利用者



この4つのカテゴリー、さらにその中でもどこにポジションしているかを博物館が意識しながら働きかけをしていく必要がある。布谷が考える博物館の学習活動の目的は「自分が住んでいる地域が好きになること」をめざすこと。これを延長させると博物館の社会的な役割とは「地域で街づくりに参加する人を増やしていくこと」である。

琵琶湖博物館の学校連携

琵琶湖博物館は1996年秋、開館であるが、1995年4月より中学校教員を1名スタッフとして迎え

た。学芸員は学校のことを知らないので、学芸員だけでは博学連携はできないと考え、学校の先生に博物館の考えていることを理解し、学校との窓口になってもらうことを考えた。しかし当初、教員が作ったプログラム案は学芸員から見れば、学校の授業そのものであった。「これは博物館がすることではない」と何度もリジェクトした1年半であった。

今でも1回だけのお付き合いとなるような出前授業は行っていない。1つの学校に長い時間かかわることを、モデル事業としてやってみた。それをモデルとして他の学校にも広げればよいと考えた。また営業活動も兼ねているのであるが、学芸員が学校を訪問し、「来館すればこんなことができる」とPRした。学校の先生の生の声を学芸員が直接聞くことで、少しでも理解を進めたい。

このあと、琵琶湖博物館での学校連携の現状をデータ等も示しながら紹介とモデル事業の1つである「伯母川探検隊 - 地域の人とつくる伯母川博物館 - 」の事業紹介があった。



事例発表

滋賀県立琵琶湖博物館 中野正俊氏

博物館のサテライト化でめざすもの・・・『地域みんなで博物館』への一歩・・・

琵琶湖博物館で今年度より取り組んでいる学校サテライト博物館は、単に博物館展示物を学校に持っていくだけではなく、博物館で収蔵している生物のレプリカや、ギャラリー展示で使用した解説パネルなどを使用することや、児童数減少による余裕教室の有効活用と、琵琶湖博物館の中長期目標である「地域だれでも・どこでも博物館」の実現を目的としている。また、日頃の学習に博物館職員やはしかけグループが参加し、先生方といっしょに授業を展開していることなどが紹介された。その小学校を会場にした先生向けの講座の紹介や展示を取り入れた授業の紹介、昼休みに実施しているワークショップなどについても紹介があった。

事例発表

滋賀県立近代美術館 平田健生氏

アートゲームで鑑賞への意欲を - 滋賀県立近代美術館の取り組み -

1980年代にアメリカで生まれたアートゲームを工夫し、さらに新しい遊び方を提案。複製図版を用い、じゃんけんゲームやジェスチャーゲーム、×ゲーム、共通点探しゲームなどたくさんの実践例が紹介された。また「母校八景」などの学校連携プログラムや「私だけの美術館づくり」など美術館での子ども向けワークショッププログラムの紹介もあった。アートゲームは絵画を分析的に能動的に見る手法であるが、さっそく土器文様、屏風や昆虫、魚など生物の観察などに応用できるアイデアの意見交換もされていた。

事例発表

群馬県立自然史博物館 武井郁也氏

「先生のための自然史博物館活用ネットワーク」の実践

学校の先生方によりよく博物館を利用してもらうために、今年度から新しく取り組みを始めている。メールマガジンで博物館情報を伝える。会員制限定掲示板で会員相互の意見交換の場をつくる。授業に役立つ実技研修会を実施する。このことで会員と博物館、さらに会員相互の交流が深まることをねらいとしている。メールマガジンがきっかけで館主催の観察会に参加してくれる先生がおられたり、成果が出てきている。教科書と展示との対照表の作成や館主催の研修会に学校の先生が出張として参加してもらう方法などの情報交換もなされた。

事例発表

兵庫県立人と自然の博物館 谷川直也氏

ひとはくの学校連携の取り組み

館の概要、学校連携事業および学校の利用状況の紹介。教員研修などにも取り組んでいるが、ひとはくの学校連携の3つの柱として「学校サイエンスキャラバン」「理数ワンダーランドひとはくサイエンスショー」「高等学校との連携事業」について紹介があった。特に継続的な学校連携事業であり、高等学校の教育課程に位置づけた「高等学校との連携事業」について詳しく紹介いただいた。地域の学校の先生とひとはくの研究員が知り合いになることや、博物館に来たときになぜ研究者が教え生徒のことが良くわかっている先生が指導しないのか（博物館の学校化か、学校の博物館化かのどちらかではないか）、ワークシートはどのようにあるべきか、「博物館での学び」の構造について考えていく必要などがあるだろう、などの問題提起もあった。学校連携をマネージメントできる人材の育成が必要であることの重要性を確認した。

事例発表

大阪市立自然史博物館 釋知恵子氏

ワークシートの禁止期間

館の概要、学校連携事業の紹介、学校の利用状況の紹介。春秋の遠足・校外学習の混雑期間、大阪自然史博物館はワークシートの使用禁止、展示物の押ボタンも禁止、見学はクラスごとに2列で整列して間を空けない、班別行動禁止、となる。禁止事項ばかり並べるのではなく、閑散期にできることを紹介し、どのように閑散期へ誘導するかアイデアにも話が及んだ。また混雑期間、館入口での待ち時間も館外にあるクジラの骨格標本の利用なども紹介いただいた。また、ワークシートや先生向け案内の作成方法等でも情報交換があった。

事例発表

九州国立博物館 永井真佐美氏

ジュニア学芸員活動と学校貸出資料「きゅうぱっく」の紹介

地元高等学校と連携して進められた「ジュニア学芸員活動」についての報告があった。興味ある高校生を募集して博物館の仕事や展示の内容、また講義を担当する学芸員から職業観などを学んだ。またそれを生徒が学校に報告することで、学校の博物館理解が進んだ。

また新規に製作された貸し出し資料セット「きゅうぱっく」について、銅鏡や金印パズル、縄文サバイバルゲームなどその貸し出し資料の一部、実物を持参。単に貸し出し資料を利用するだけでなく、必ず子どもの手元に残るアイテムを入れたことや、学校の先生に利用してもらう広報方法なども紹介があった。

各館の「貸し出しキット」についての情報交換

総合討論より（進行：琵琶湖博物館 戸田孝主任学芸員）

お金と人

外部資金に積極的に応募するという方法などが紹介された。

館内で学校連携担当が1名しかいない館もあり、今回のネットワークを活用して相談等できるようにしていきたいと意見があった。

研究者（飼育スタッフ等含む）は学校連携事業をしたがらない？

組織としてやっている館、一覧表をつくってやっている館など、研究者みんなに学校連携にかかわってもらう工夫、研究者のモチベーション・生徒のモチベーションをあげる工夫を出し合った。

- 来館前に講義をする研究者から調べてくることを宿題として出す。
- 2人組みで学校に対応し、児童生徒と研究者の間に学校連携担当が入り、研究者にインタビューしながら講義を進めていく。
- 小学生に難しい言葉を使う研究者等もいるが、場を踏んでもらうことにより、研究者もスキルアップする。
- 研究者は思いがあるので、伝えることは上手くても、子どものつづやきが拾えないこともあるので、2人組で進めるとよい。
- 特別展は事務方、広報、ショップ担当まで含め各部署から1名のプロジェクトチームで進めていく。
- 研究者が学校へ営業活動に行くと学校の実態や学校の思いの一部でもわかってもらえるので良い。
- 立場の違う職員がいることで生まれることもある。うまくいっている館は何年もかけて構築してきた館が多い。

入場料が博学連携の障害となるか？

近年、無料化した館から報告。敷居が低くなったが入館者数に対する意識はさらに厳しくなった。交通の便・交通費の方が障害になっている館が多いようであった。

インターネットを活用した博学連携を進めているところは？

データベース（電子図鑑）を持っている館は利用されているが、学校が利用しているのか、個人が利用しているのかわからない。

ホームページに出しておけば役に立つ情報は、利用してもらえる。

ワークシートのダウンロードもできるように学校向けのページをつくっている館も多い。

G I S（地理情報・地図とのリンク）を活用した生き物マップづくりなど、学校に良かれと思って取り組んだが、あまり利用してもらえなかった。ツールと現場とがうまくリンクするのは難しい。

まとめ

小さなトピックに別れ、一貫した討論とはならなかったが、このようなメンバーが一同に会し、話をすることの機会が今までほとんどなかった。このような場をもてたことに意義がある。

布谷氏の話

多様なことが各館で行われており、まだまだ噛み合わない状態である。

お金と人の話があったが、ハード面・金銭は真似できないことも多い。このネットワークを生かしてソフトの交換や、金銭面でも協力できるところは協力して行っていけばよいのではないか。

博物館の立場の人間と教員としての立場の人間と、もともと違う立場であるから、それをいっしょにやるというならば、時間をかけて話し合い、双方、何を目的とするか、何を獲得目標にするか、きちんと話し合い納得づくで事業に動き出す。今日、集まっている館はそれができており、比較的うまくいっているところが多いが、残念ながらそうでない事例も多く聞く。「学社融合」という言葉を私は好きでない。簡単に「融けあう」ものではない。きちんと議論を繰り返して成功するものであると思う。そうはいいながら、こういう事業はまだまだ発展する可能性のある分野であると考えている。

どなたかの発表の質問に「収蔵庫の資料は使うのか」というのがあったが、使えばいいと思う。収蔵庫の資料は使うためにあるものなのだから、もっと学校の方が積極的に言えばいいし、博物館も求められれば、素直に出すべきだ。

ミュージアム・ティーチャーという語について。

本来の用語では欧米のキュレーターがいて、エデュケーターがいて、ミュージアム・ティーチャーがいて3人が相談をして博物館としての教育活動を組んでいく。博物館の専門職員としての欧米の仕事分野として存在する語である。日本は今まで教育普及を学芸員がやってきたけれども、やれていなくて、ボロボロ穴が空いていることが明確になり、これではダメだということで、学校の先生を入れるようになり始まった。日本の現状では、学校の先生が博物館に入って、その方が入ると本当によい成果があがることを示す必要がある。それは博物館に入った学校の先生だけががんばってできることではなく、学芸員と組んでこそ初めてできる仕事であり、そういうやり方を博物館の世界でやっていることを学校にも博物館界にも示していくことがある。名刺に「エデュケーター」と書いている人が日本でも増えてきたし、将来的には専門職としてミュージアム・ティーチャーが始まっていくであろう。今はそういう言わば時代のつなぎ的な時期であり、将来に向けて、今の学芸員もミュージアム・ティーチャーもいい仕事をしていく必要がある。来年、九州でこの続きをやってはいかがか。

中山氏の話

いろいろ話題が出たが、コミュニケーションがテーマであると思う。学社連携はいいが、融合は私も賛成できない。学芸員と教員がいっしょになったような仕事をつくれればいいが、みんながそうなくてもいいというわけではない。やはり別々の者が協力できることが重要である。

サイエンスコミュニケーションが今、はやりである。これまでは「科学理解の増進」、今は「サイエンスコミュニケーション」。知らない人に知っていることを伝えるのが「理解の増進」、それだけではない。科学を知っている科学者とそれを知らない市民お互いの文化が交じり合うことが重要で、昨年のサイエンス・アゴラのシンポジウムではイギリスの報告で、「市民の文化を科学者に教えることが、まず始まりである。科学者は研究のことはよく知っているが、市民の常識を知らない。その市民文化を科学者に教える中で、科学者から市民が学ぶのである」と言われていた。それがサイエンスコミュニケーションである。

学校は学習指導要領の中のことだけをしようとするのであって、博物館は博物館独自の伝えたいこと、違った目的がある。学芸員とミュージアム・ティーチャーとのコミュニケーションもそれであって、ミュージアム・コミュニケーションというものが重要になってくる。そういう点ではコミュニケーションを主眼に置いたこのような催しが、今回琵琶湖博物館で行われたことに意義があり、次年度以降にも続くことを期待したい。



各園館学校連携ご担当者様へ

教員採用試験で都道府県に採用され博物館で働いているミュージアム・ティーチャー(博物館教員)中には学芸員(研究員)や行政職員へ身分変更があったり、年限が決まっている研修派遣であったり、指導主事等としておられる場合もあるが、日本全国で200名ほどが日々、よりよい学校連携について考え、実践を重ねている。同じ立場の者が園館に1名しかいない、都道府県でも数名しかいない場合もある。しかし一方、学芸員や飼育員にも、何とかもっとよい学校教育での活用方法を探り、実践している方もおられる。

今回、歴史民俗系・自然史系の博物館、科学館、水族館、美術館が集まり、共通の悩みがあるとともに、貸し出し資料セットを作る際などの共通にいかせるアイデアがあることも確認できた。また教育的に共通の話もでき、園館スタッフとの会話だけでなく資料との対話や見学者同士の対話による学びについても考えることができた。総合討論ではトピックの羅列に終わってしまったが、休憩時間や1日目夜の情報交換会での情報交換もたいへん有益であった。ワークショップの後も個人的にメール等で情報のやりとりをしているところもある。

このワークショップでも中山先生が予告されていた通り、新しい学習指導要領の案が公表され、社会科・理科ともに「指導計画の作成と内容の取り扱い」に「博物館や郷土資料館・科学学習センターの活用」、「遺跡や文化財などの観察や調査」が明記された。また総合的な学習の時間のところにも「博物館等との連携、地域の教材や学習環境の活用」が示され、学校による園館での活動がふえることが予想される。それと同時に「来館(来園)することだけが目的」とならないように、ますます学校連携担当者のコーディネート力が必要とされるのではないだろうか。

今回のネットワークをいかしながら、今後も情報交換を続けて行きたい。ワークショップを企画した私が無理やりであるが、2008年度には福岡県(九州国立博物館・北九州市立いのちのたび博物館・海の中道海洋生態科学館)で第2回を開催していただくようお願いした。ぜひ輪が広がるように全国の学校連携担当者をお願いしたい。

最後にこの記録は中村が作成したものであり、発言のあった各個人の意図と反するところがあるかもしれないことはご承知おきいただきたい。

2008年3月12日

今回、参加いただいた園館(順不同)

滋賀県立近代美術館、滋賀県立朽木いきものふれあいの里、みなくち子どもの森自然館、群馬県立自然史博物館、横浜市歴史博物館、富山市科学館、石川県立歴史博物館、みのかも文化の森、大阪歴史博物館、淀川資料館、大阪市立自然史博物館、国立民族学博物館、キッズプラザ大阪、兵庫県立人と自然の博物館、神戸市立青少年科学館、姫路市立水族館、鳥取県立博物館、広島県立歴史民俗資料館、北九州市立いのちのたび博物館、海の中道海洋生態科学館、九州国立博物館、宮城県立西都原考古博物館、滋賀県立琵琶湖博物館

滋賀県立琵琶湖博物館

交流担当 主査 中村公一

TEL 077-568-4811

FAX 077-568-4850

E-mail koichi@lbn.go.jp (lbnはLBMの小文字です)